

金融経済概観

金融市場動向

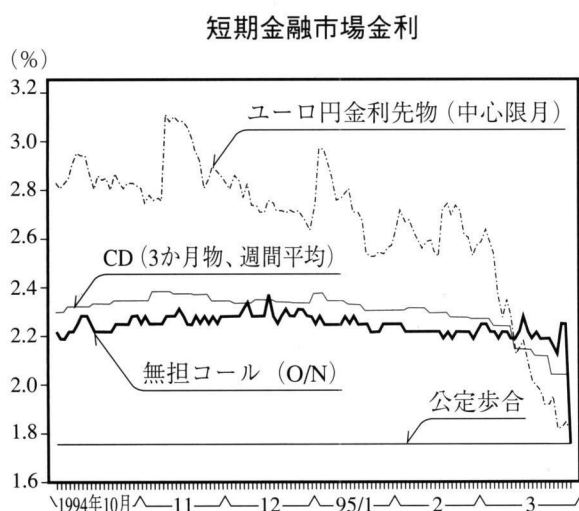
— 平成7年3月 —

(平成7年4月17日)

1. 短期金融市場

3月中の無担コール・オーバーナイト物レートは、月初より概ね横這いで推移していたが、月末に大幅に低下した。CD（譲渡性預金）3か月物金利については、月初より低下基調を辿った後、月末にかけて大幅に低下した。一方、ユーロ円金利先物（3か月物、金利ベース）は、月中を通じて大幅に低下した。

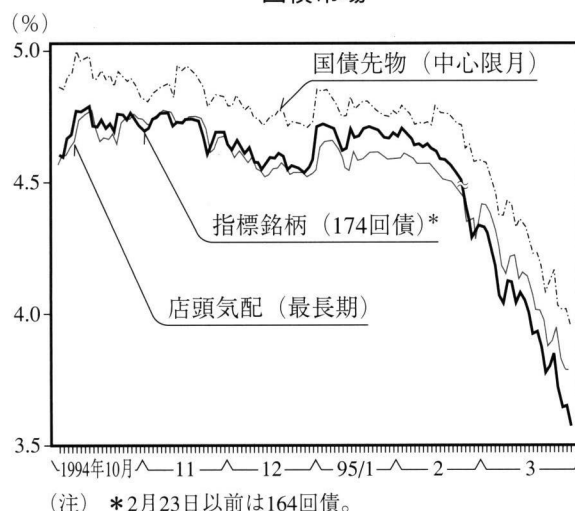
コール・プロパー手形市場資金平均残高（全国）は4兆2千4億578億円と前月（4兆1千7億838億円）比増加した。



2. 資本市場

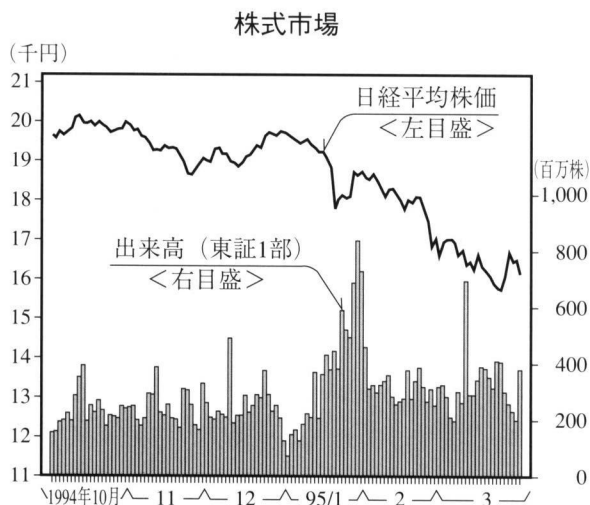
3月の長期国債利回り（174回債）は、月中を通じて大幅に低下し、結局3.595%で越月した（前月末4.350%、国債先物中心限月利回りは3.966%＜前月末4.591%＞で越月）。国債の出来高は、現物（店頭取引）は前月を大幅に上回ったほか、先物も高水準の前月並みとなった。

既発債市場利回り
— 国債市場 —



株式市況（日経平均株価）は、為替円高等を嫌気して下落基調を辿り、結局16,139円

と前月末（17,053円）を大きく下回って越月した。株式出来高（東証1部、月中1営業日平均）は、3.27億株（速報）と前月（3.39億株）を下回った。



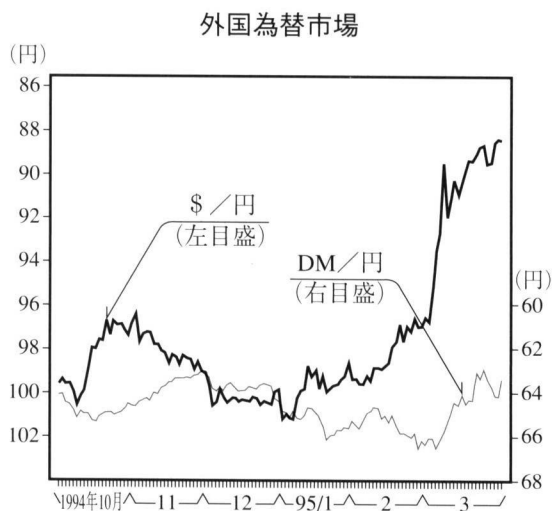
3月の国内公募普通社債は、一部鉄道・電力の大口起債がみられたものの、長期金利の急低下から様子見気分が広がり、月中2,320億円（2月5,400億円）と前月に比べやや落ち着いた発行となった。一方、国内エクイティ市場での発行（2月払い込み分、増資を除く）は、株価下落の影響から前月と同様発行延期となる案件もみられ、一段と低調な発行となった（2月1,935億円→3月930億円）。

3. 外国為替市場

3月の円の対米ドル直物相場（東京市場、17時時点）をみると、一部欧州通貨のERM基準レート引き下げをきっかけとした対米ドル・独マルク高につられる形で一気に80円台乗せ（3月8日89.38円）となった後も堅

調に推移し、結局88.38円で越月した（前月末15時30分時点96.93円）。円の対独マルク直物相場（東京市場、17時時点）は、独金利の低下を眺めて中旬以降上昇し、結局63.24円で越月した（前月末15時30分時点66.11円）。

なお、東京外国為替市場の出来高（円対米ドル、直物および先物・スワップ計、1営業日平均）は214.3億ドルと、前月（114.8億ドル）を大幅に上回った。

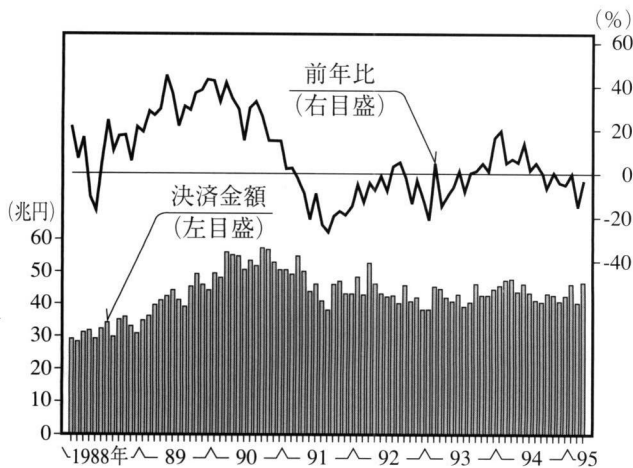


4. 決 済

3月の資金決済の金額（1営業日平均）をみると、手形交換高（東京）は前年同月を大幅に下回った（前年比△45.3%）が、全銀システム取扱高は前年同月を上回った（同+4.6%）。この間、外為円決済交換高は前年同月を上回った（前年比+11.8%）。また、国債の決済金額（1営業日平均）については、移転登録、振込口座振替ともに前年同月を大幅に上回った

(移転登録：前年比+37.3%、振込口座振替：同+24.7%)。

決済金額



(注) 1. 1営業日平均。
2. 手形交換高(東京)、全銀システム取扱高、外為円決済交換高の合計額。

5. 資金需給、金融調節

3月の資金需給をみると、銀行券要因が4,061億円の不足(前年同月2,946億円の余剰)となった一方、財政等要因は、4兆9,579億円の余剰(同3兆2,388億円の余剰)となったことから、全体では4兆5,518億円の余剰(同3兆5,334億円の余剰)となった。

こうした状況下、日本銀行は買入手形の期日落ちを進めること等により資金を吸収した。

4月の資金需給(国債発行織り込み前)を窺うと、銀行券要因については、月中1兆1,000億円程度の不足(前年同月1兆4,077億円の不足)となる見通しである一方、財政等要因は、地方交付税交付金や公共事業関係費の支払いを中心に、8兆4,300億円程度の余剰

(同6兆9,688億円の余剰)となる見通しであり、この結果、全体では7兆3,300億円程度の資金余剰(同5兆5,611億円の余剰)となるものと予想される。

6. マネーサプライ、銀行券、預金・貸出

2月のM₂+CD平残前年比伸び率は+3.6%(速報)と前月に比べ0.4%ポイント上昇した。また、広義流動性の平残前年比伸び率は+4.0%(速報)と前月に比べ0.3%ポイント上昇した。

3月の銀行券平残前年比は+4.4%と前月(+4.5%)を若干下回った。

3月中の金融機関の預金・貸出動向をみると、預金平残(実質預金+CD、都銀、地銀、地銀Ⅱ)の前年比は2.3%と前月比伸び率が低下した。一方、総貸出平残(都銀、長信、信託、地銀、地銀Ⅱ)の前年比は△0.0%と10か月連続の前年割れとなったが、2か月連続でマイナス幅が縮小した。

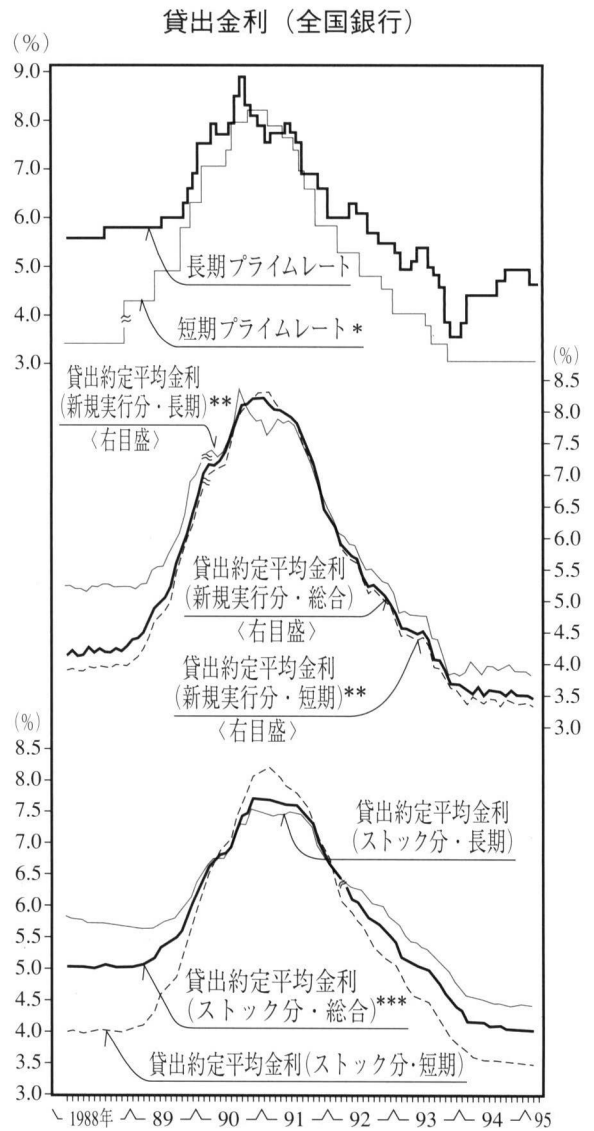
7. 貸出・預金金利

2月中の貸出約定平均金利(全国銀行)をみると、新規実行分については、短期が2か月ぶり、長期が3か月連続でそれぞれ小幅の低下となったことから(短期：前月比△0.049%、長期：同△0.041%)、総合でも4か月連続で小幅の低下となった(同△0.037%、1月3.472%→2月3.435%)。

また、ストック分についても、短期、長期、当座貸越ともに低下傾向を持続し(短期：前月比△0.008%、長期：同△0.016%、当座貸越：同△0.011%)、総合では、20か月連続で既往ボトムを更新した(総合：1月

4. 046%→2月4.032%)。

この間、2月の定期預金金利(自由金利分<1千万円以上>、3か月以上6か月未満の全銀受入金利平均)は前月比僅かながら低下した(1月2.108%→2月2.090%)。



(注) * 1989年1月以降は都市銀行の中で最も多くの銀行が採用した金利。
 ** 1990年4月以降は地方銀行Ⅱを含む。
 *** 1992年4月以降は当座貸越を含む。

(調査統計局)